

授業改善イメージ①（ソフトバレーボール／中・高学年）

普通の体育授業

T：準備運動をしましょう。



準備運動は、ゲームに関連する運動になっているのかを考える必要があります。

T：前の時間によかったプレイはありましたか。

C：サーブがうまくいきました。

C：声を出してうまくつなげることができました。

C：空いているところがあったので、そこをねらって打ったら得点できました。

T：たくさん得点できるように、作戦を工夫してゲームをしましょう。



「作戦を工夫しましょう。」は、抽象的で、ねらいが不明瞭です。前時の振り返りをもとに児童にとって必要感のある課題を提示することが、児童主体の授業づくりには欠かせない要件となります。

T：チームで考えた作戦を意識して練習しましょう。

C：練習何する？

C：とりあえずゲームをしようよ。

T：作戦を意識した練習をしようね。このチームの作戦は何ですか？

C：大きな声で励ましたり、誰がボールをとるか声をかけあったりすることです。

T：まずは、つなげることが大切だから、つなげる練習をしましょう。



作戦がどのようなものなのか、理解していない児童の姿が浮かび上がってきます。必要感のない学習課題であることやよいプレイのイメージができていないことから、主体的な練習の時間になりません。

T：では、ゲームをします。

C：ナイスキャッチ！ 高く上げたほうがつながるよ。

T：ナイスプレイ！ ナイスキャッチ。がんばれ！



学習課題に必要感のない状況で練習を積み重ねても、練習とゲームが結びつきません。教師の支援も、「がんばれ」「ナイスプレイ」といったよいプレイへの抽象的な称賛のみとなってしまいます。

T：今日の授業を振り返って、うまくいった作戦はありましたか？

C：ぼくたちのチームの作戦は、「声かけをしよう」で、みんなで励まし合ってゲームすることができました。

C：高いボールを上げてパスをすると、つながりやすかったです。

T：次の時間も作戦を工夫してよいプレイを目指していきましょう。

これから目指したい体育授業

T：チームで落とさないようにパスをつなげましょう。

C：先生、ぼくたちは30回連続でつながりました。

C：しっかり足を動かして、体勢を低くしているとつながりやすいよ。

T：集合しましょう。前の時間に、赤チームがとてもよいプレイをしていました。紹介してください。

C：相手チームは後ろ側にいたので、返すときに前側をねらったら、たくさん得点がとれました。

T：相手コートのどこをねらったらよいかを考えてプレイしたんですね。強弱も大切な？

T：青チームもとても素晴らしい守り方を考えていましたね。

C：私たちは、前の時間に真ん中をねらわれていたので、4人で真ん中に寄って、ボールを落とさないようにしました。

T：なるほど。真ん中をカバーして、サイドはそれぞれがボールをとるように役割を明確にしたのですね。

T：「相手コートに落とすため」や、「自分のコートに落とさないため」に、どんな工夫ができるか考えてゲームをしましょう。



前の時間の児童のよいプレイを紹介し、具体的なよいプレイのイメージをもつことが大切です。このような課題提示場面の積み重ねによって、チームの練習の時間でどのような練習をしたらよいのか明確になり、意味のある時間となります。

T：よいプレイのイメージを大切に、チームで練習しましょう。

C：強いボールを相手コートの空いているところに返すことが作戦だから、後ろの人は前の人に返して、そのボールを高くあげて、打つ練習をしようよ。

T：よい練習をしているね。パスとアタック、どちらを大切にしているのですか？

C：パスはつながるので、アタックです。

T：それならば、アタックを中心にした練習で、こんな練習の仕方もありますよ。



練習内容は、児童任せにするのではなく、児童の思いに寄り添った上で、積極的に紹介していきましょう。

T：「落とすため」や、「落とさないため」に工夫したプレイやうまくいったことはありますか？



振り返りの内容をもとに教師の意図する内容を児童の立場から吟味し、次時の学習課題を設定します。

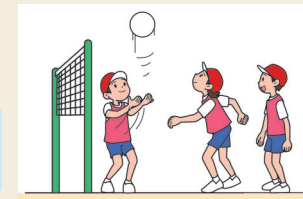
ポイント解説①【必要感のある学習課題の提示】

【児童と教師の思いや願いのすり合わせ】

児童は、学習を通して気づいたことや分かったことなど学びが多くあります。その学びに関わる言語表現や身体表現を教師が見取り、そのうえで教師が学びの内容を再考することが大切です。この作業を積み重ねていくことで、児童と教師双方にとって、必要感のある毎時間の学習課題をつくることができます。



アタックを中心とするなら、こんな練習がいんじゃないかな。



光文書院『体育の学習6年』P.18より

【振り返り→学習課題のスパイラル】

毎時間の学習課題は、必ず前の時間の振り返りをベースに考えます。なぜならば、前の時間の振り返りの内容は、児童にとってうまくいったから次も試してみたいことだったり、うまくいかなかったけれど、新たな視点で取り組んでみたいことだったり、まさに必要感を伴う内容だからです。必要感のある学習課題をもとに、1時間の学習に取り組み、その学習課題について振り返る、そしてまた、その振り返りをもとに学習課題を考える、このスパイラルによって、学びが積み重なり、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」が高まっていきます。

ポイント解説②【運動特有的人のもしろさの追究】

【ソフトバレーボールのおもしろさは？】

ソフトバレーボール特有のおもしろさは何でしょうか。ラリーを続けることでしょうか、それともアタックを打つことでしょうか。これらはおもしろさを味わううえで必要な技能、もしくは要素で、特有のおもしろさとは言えません。このように、その運動がもつ特有のおもしろさを理解せずに、ゲーム・ボール運動領域の授業づくりをしている授業者は少なくありません。筆者はソフトバレーボールのおもしろさを「自陣コート内では相手にじゃまされないという特徴を利用しながら攻撃を組み立てて、相手コートに返せないようなボールを手で打って相手コートへ送り、相手がそれを返せないときに得点になるという形で勝敗を競い合うところにおもしろさがある」と整理しています。このおもしろさを追究できるように、授業づくりをしていくことで、ねらいや学習内容が明確になっていきます。

【新学習指導要領におけるネット型】

2017年に改訂された小学校学習指導要領解説体育編において、中学年で「バドミントンやテニスを基にしたやさしいゲーム」が、高学年で「バドミントンやテニスを簡易化したやさしいゲーム」が例示されました。これらのゲームは、ネット型の「攻守一体型」に分類されます。一方で、これまでに取り上げられている「ソフトバレーボール」や「プレルボール」はネット型の「連携プレイ型」に細分されます。

このように、同じネット型でも、特性が違うことが理解できると思います。「攻守一体型」「連携型」のそれぞれの運動特有のおもしろさを理解したうえで、授業づくりをすることが大切です。誌面の都合上、「攻守一体型」の詳細は割愛しますが、筆者は攻守一体ネット型ゲーム「テニピン」の開発者です。興味ある方は、日本テニス協会テニピン専用ホームページもしくは、右の二次元コードにアクセスしてみてください。



ポイント解説③【価値あるチーム練習】

【作戦を意識したチーム練習】

「作戦を考えよう。」「考えた作戦を実現できるように練習しましょう。」といった教師の声かけは、放任的な指導ではないでしょうか。具体的な作戦が考えられるように、考えた作戦を実現できるように練習方法を選択できるように、教師の働きかけが求められます。具体的には、「ポイント解説①必要感のある学習課題の提示」で述べたように、振り返りや学習課題の提示場面で、よい動きや作戦を紹介し、児童がよいイメージをたくさんもてるように心がけていきましょう。また、考えた作戦がそのチームに適切かどうかを、適宜授業者が確認し、フィードバックすることも大切な働きかけです。

【積極的な練習内容の提示】

「練習しましょう。」といっても、どんな練習をしたらよいのか分からない児童の姿があります。初めてその運動を経験する児童が多い中、練習の仕方は分かりません。よって、教師が、「パスの練習には、こんな練習があるよ。」「空いているところをねらうには、こんな練習をしてみたらどう？」と積極的に関わることで、意味のある練習となります。ドリル的に、「全員で、このパス練習をしましょう。」という提示の仕方だけではなく、児童やチームの必要感に応じて提示していくことが、主体的な学びを生むうえでも重要です。そのゲームでは、どのような技能や作戦が求められるのか、またどのような練習があるのか、教材研究は欠かせません。

授業改善イメージ②（跳び箱運動／高学年）

普通の体育授業

- T：準備運動をしましょう。
T：次に馬跳びをしましょう。30秒で何回できるか挑戦してみましょう。
C：30秒で20回できたよ。
T：集合します。今日は「台上前転」を行います。台上前転のこつはわかりますか。
C：開脚跳びと同じように、踏み切りを強くする。
C：着地をピタリと止める。
C：手の付く位置が少し変わると思う。
T：これまで学んだ開脚跳びのこつと関連づけて考えられていてすばらしいですね。
T：誰かできる人はいますか？



運動の得意な児童に示範をやってもらいましょう。その子にとっては輝ける場になるし、教師は、その子の動きを通して解説できるよさがあります。

- T：〇〇さんのどんなところがよかったですか？
C：踏み切りで「パン」と大きな音を立てていた。
C：手を手前に「パン」ではなく、「パン」とやさしく着いていた。
C：着地はクルッと回った後、サッと立っていた。
T：では、今、みんなで話し合ったこつを生かして、台上前転に挑戦してみましょう。



台上前転の技を行うにあたり、スモールステップの場をつくりませんが、一人ひとりの実態を考慮せずに場づくりをすると、場によって人数が多かったり少なかったり、偏りが出てしまいます。一人ひとりの実態に応じた場づくりを心がけましょう。

- T：〇〇さんは、強く「パン」と踏み切って、もっと腰を高くあげてみよう。そうすれば、回れますよ。



適切なアドバイスですが、〇〇さんは、適切なめあての場を選択できていないかもしれません。その場合、成功体験を味わえるように、段数の低い場で挑戦できるようにしたり、跳び箱の上にマットを置いたりするなどの配慮が必要です。また、教師からの支援だけでなく、友達同士の対話から学びが生まれるように工夫が必要です。

- T：今日は台上前転を行いました。どうでしたか？つかんだ技のこつを教えてください。
C：踏み切りはやっぱり強く「パン」と音を立てると、腰があがる。
C：おへそを見て回ると、スムーズに回れる。
C：踏み切りは「パン」、手を着くときは「パン」、くると回って、「トン」と着地するといひ。

これから目指したい体育授業

- T：跳び箱で使う部位をほぐしてから、馬跳びをします。30秒で何回できるか挑戦しましょう。
T：開脚跳びでシンクロさせてみましょう。〇〇さんと〇〇さん、やってみてもらえますか。
C：すごい。きれいに二人の動きが合っている。
C：踏み切りの音がそろっているね。
C：手の着き方やタイミングも合っていて、美しい。



学んだ技でシンクロというアクセントを付けると自然と児童同士の対話が生れます。

- T：前回と同様に、はじめに、課題別練習をした後、「チーム跳び箱」に取り組みます。緑チームの演技の工夫がすばしかったので、映像で見てみましょう。
C：シンクロや交差を使っているから美しい。
C：踏み切りの音を「パン、パン、パン」と大きくしたり、小さくしたりして「花火」を表現している。
C：一つ一つの技が丁寧で、開脚跳びは着地でしっかり3秒静止している。
T：では、「チーム跳び箱」の中で活用したいと考えている技を中心に、課題別練習をしましょう。



次頁・図②のような場をつくり、前時までにめあて表(次頁・図①)に記名するようにします。それを見て、場づくりを行うとともに、個々のめあてが適切かを確認します。こうすることによって、一人ひとりの必要感に応じた場で練習に取り組むことができます。同質集団での学び合いが活性化します。

- T：「構成(空間・時間・技術)」のどこに着目するかを考えて、チーム跳び箱に取り組みましょう。
C：〇〇さんの台上前転は、足を伸ばしたら、もっとかっこよくなるよ。
C：かかえ込み跳びのシンクロを合わせるために、跳んでいない人たちが「パン、パン、パン」と言おうよ。
C：開脚跳びの時間差を入れたいね。踏切のパンと着手のパンをそろえて跳んで、これを連続でやっていけば、タイミングが合うと思うよ。「パン、パン」で声に出してタイミングを合わせてみようよ。



「この技をできるようにになりたい」「こうしたらもっと上手いくかもしれない」など技の学習に必要な感をもっているため、対話が自発的に行われ、深い学びへとつながっていきます。

- T：チーム跳び箱で3つの構成の観点について分かったこと、気づいたこと、学んだことはありますか。
*「空間・時間・技術」に分けて、学びを整理します

ポイント解説①【技ができるようになりたいと思える跳び箱学習】

【チーム跳び箱とは】

チーム跳び箱とは、個人を生かした集団を表現できる楽しさがあり、個人のできる技を活かして、チームとして一つの演技を創り上げていく跳び箱運動を通した集団演技です。チーム跳び箱の特性として以下の4つが挙げられます。
・技を美しくする意識が自然と生まれてくる。
・友達の技に関心をもつようになる。
・体ほぐし運動の要素を取り入れることができる。
・短い時間の発表会の中で「集団の勢い」を表現できる。

【なぜチーム跳び箱？】

「この技をできるようにになりたい」「挑戦してみたい」と児童が必要感をもって学びを深められるような跳び箱運動の

学習への「仕掛け」として「チーム跳び箱」の単元を構成しました。

集団化する意義は、楽しみ方の拡大や集団内の個々が互いに刺激し合い、個人では思いつかないようなアイデアが生まれたり、個人ではできなかったことをチームワークで可能にしたりするところにあります。また、個人レベルでできる運動でも集団で演技するとなると、自分の身体操作を友達の動きに合わせるといった新たな課題が生じます。友達のペースを考えるとともに技のポイントを深く意識して取り組むことを通して、一層の運動習熟を図ることができるほか、演技をグループで考えたり高め合ったりしながら味わう集団的な達成感、個人では味わえない、チーム跳び箱の特性と言えます。

ポイント解説②【個人の必要感を大切に課題別練習】

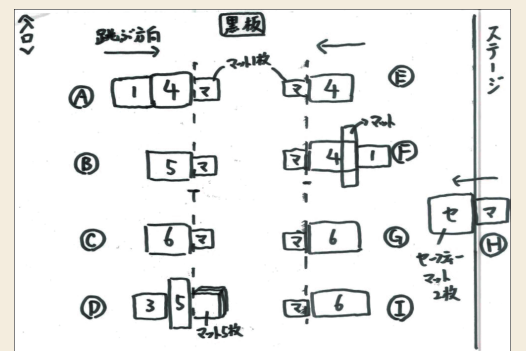
【一人ひとりの適切なめあてを把握する】

技能の向上を図るためには、適切なめあてをもって取り組むことが大切です。しかし、児童は適切なめあてをもてずに、「なんとなく」や「友達がいるから」といった理由で場を選択することがあります。配布したステップカードを見て、どの技のどこのステップの場で練習したいかを選択し、めあて表(図①)に書き込むようにします。一人ひとりが、どの場でどのような技に挑戦しようとしているのか、授業前に把握することで、事前に適切な場に誘導することができますし、本時の指導にも生かすことができます。

【図①】

	開脚跳び	かかえ込み跳び	台上前転	音はね跳び
ステップ1				H
ステップ2	A		F	
ステップ3		P		
ステップ4		E		
5歳				
6歳	B			
7歳				I
チャレンジ	C	G		

【図②】



ポイント解説③【対話を活性化するチーム跳び箱】

【話し合いの視点】

個人の課題別練習の後、授業後半は、チームになり、「チーム跳び箱」の練習をします。話し合いの視点は、「構成の創意工夫」とし、3つの観点を示します(右)。「チームのためにかかえ込み跳びをできるようにになりたい。」「もっと膝を伸ばせるようになれば、大きさを表現できそう。」「など深い学びへと向かっていきます。

チーム跳び箱は演技ですが、常に「技術構成」に目が向くように授業を展開するようにしましょう。

話し合いの視点となる「構成の創意工夫」

<構成の3つの視点>

- ▶場の設定・回る方向・シンクロ等(空間構成)
- ▶演技の順番・リズム・タイミング・時間差・速さ等(時間構成)
- ▶技のできばえ・種類・ポーズ等(技術構成)